Jリーグの新大会方式移行に関する考察

A study regarding the switchover to the new league system in J-league

1K10C441-3 守屋 錬

主査 宮内 孝知 先生

副査 武藤 泰明先生

【研究動機・研究方法】

2015年度より、「2ステージ制+ポストシーズン制」という新大会方式が導入されることが発表された。これにより13億円の減収を食い止め、新たに10億円の収入が見込めるとされている。これまでも大会方式の変更は幾度となく行われてきたが、今回の改革については、「十分な議論の余地もなく、サポーターの声を無視した決定」として大きな反発を受けている。本論文では、今回の新大会方式が本当に今のJリーグにおいて適切なのか、様々な意見を盛り込んだ上で検討した。

また研究方法としては、このテーマにおいて参考となる文献等が非常に少なかったため、WEB上でのコラムや、筆者が識者に直接インタビューを行った際の内容等を盛り込んでいることを付記しておく。

【第1章 Jリーグの現状】

Jリーグの経営状況、人気低迷の理由、日程の過密化といった諸問題があることを取り上げた上で、アジア戦略やJ3の創設など、現在Jリーグが取り組んでいる施策についても明らかにした。

【第2章 新大会方式について】

本章では、全5項に分けて新大会方式について説明している。第1項では、今回の新大会方式について図などを用いて詳細な説明を試みた。今回の新大会方式は、「年間勝ち点の多いチームの優遇」と「ポストシーズンを確実に実現すること」の2点を抑えているという意味で、2004年シーズンまでの「2シーズン制+チャンピオンシップ」システムとは異なる形式をとっており、サポーターやスポンサー・メディアなどステークホルダーへの配慮を意識した施策と言えるだろう。第2項では、欧州の主要リーグシステムとは異なるレギュレーションを採用している例を、中南米・北米・欧州・アジアと地域別に分けて紹介している。興業的な意味で成功しているリーグは多いものの、一部の強いクラブのみが旨味を得て、それ以外のクラブが厳しい経営状況にあるなど、それぞれのリーグが向き合うべき課題が多いことがわかった。第3項では、NPBのクライマックスシリーズを題材に、日本の他プロスポーツのプレーオフ制度について説明している。一部で大きな注目を集める日本のプレーオフシステムだが、日本一決定までのプロセスが長すぎるという意見もあり、改善の余地が感じられる。第4項では、

雑誌で取り上げた識者の意見について紹介した。どの識者も100%賛成・反対という者はおらず、各々が指摘する問題こそが、今後より良いリーグにしていくためのヒントとなる。第5項では、今回の改革案についてWEB上で集められた意見と、筆者が独自にFacebook上で募った意見を元に、サポーターを含む一般の人々がどのように思っているのかどうかを明らかにした。第4項と同様に賛否が分かれたが、Jリーグの課題を鋭く捉えた指摘も多くあり、こうした一般の意見を無視して改革を進めていくことはできない。

【第3章 問題点の考察】

これまでの文献をもとに浮かび上がった問題点が、①代替案の模索、②プレーオフシステムの不備、③チームマネジメントにおける悪影響の可能性、④スケジュールの逼迫化、⑤収入の使途、⑥協会との連携の計6点である。さらにこれらを考察する上で今後の課題として、①新規顧客に対するアプローチ、②必要な競争の姿勢の2点を取り上げた。

【第4章 結論】

リーグにとっての理想像とは、潤沢な運営資金のもと、スポンサーを始めとしたバックアップが充分にあり、実力のあるクラブ同士が凌ぎを削り、老若男女問わない多くのサポーターが、熱狂と興奮の中でそれを享受している状態であると考えられる。今、Jリーグはその理想を実現するための「資金」という根底が崩れようとしている。その現状に目を瞑ってまでも、「試合の公平さ」とか「優勝の重み」を主張することは、本当にそのリーグのことを思いやった意見なのだろうか。

筆者は今回「条件付き賛成」という立場で論文を書かせていただいた。というのも、今回の改革案を実行したところで、必ずプラスになるとは言い難いからだ。また中西氏の言うように、今回のシーズン制改革案はあくまで「スターター」としての役割であり、仮に今回の改革が上手くいったとしても、その後の改革が上手く運動していかなければ何も解決につながらない。今後Jリーグが、毎試合スタジアムが観客で埋まり、国民の高い関心を集めるようなコンテンツであり続けるためには、課題に対して真摯に向き合い続け、更なる改善を行っていかなくてはならないということを、本論文の結論として主張しておきたい。